

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Diary of Hisakatsu Hijikata ( I )

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001075">https://doi.org/10.15021/00001075</a>

## 註

### 〔第1冊〕

- 1) 兄上 = 久功の長兄、久俊。明治三十二年（1899）生まれ。当時、第一高等学校在学中。
- 2) 惣ちゃん = 中井惣之助。久功の兄・久俊の一高の同級生、中井良三郎の弟。久功の東京美術学校の後輩で、当時、西洋画科在学中。
- 3) キヤナル = 玉川上水のこと。当時、久功が住んでいた、大原、代田を流れていた。
- 4) きみえさん = 君江。当時、長崎から水村家に寄寓していた。後、九州へ帰り、結婚した。
- 5) 大原橋 = 玉川上水に架かっていた橋。現・世田谷区大原2丁目20付近にあった。
- 6) 前の芝生 = 山口家の家の向かい側にある井上牧場（現・大原1-43）の中の芝生。牧場の広さは、約4,000㎡あった。
- 7) 家 = 麴町区上六番町9の祖父・柴山矢八の家。矢八が退役して、鎌倉の別荘に移ったので、当時、久功達一家が住んでいた。
- 8) 高 = 高勇造。音楽家（弦楽器奏者）。
- 9) 笹塚 = この年の夏休み、久功は、麴町区上六番町の家を離れ、中井惣之助と笹塚に家を借りて、一月余り暮らした。この間、中井家、山口家、水村家の人々と親しくしていた。このコミュニティを「武蔵野草房」と呼んでいた。最寄の駅が笹塚であったことから、日記には、「笹塚」と書かれているが、山口昇の家は、世田谷区大原町1127（現・大原1-42）にあり、久功らもその近くに住んでいた。京王電車は、大正二年（1913）に、笹塚―調布間が開通し、大正四年（1915）には、新宿追分―笹塚間が開通していた。
- 10) 保 = 小城堡。小城斉・たかの長男。
- 11) 守山公園 = 現・世田谷区代田にあった公園。元々、羽根木町の大地主・芹沢新平が所有した庭園（苔樹園）であったが、大正六年（1917）、一般の遊覧に供するため、公園として公開された。名前は、「公園」であったが、実際は原始林のようであったという。後、箱根土地株式会社によって、宅地造成された。
- 12) 青木 = 青木光二。学習院の同窓生。青木信光（子爵）の次男。大正九年（1920）4月、二十歳で死去。
- 13) 小石川 = 小石川林町にあった土方与志邸のこと。敷地は2万坪あり、邸内にあった地上2階地下1階の西洋館の地下には、与志の設立した「模型舞台研究所」があった。
- 14) 今サン = 今純三。明治二十六年（1893）、弘前生まれ。今和次郎の弟。大正元年（1912）、早稲田工手学建築科（夜間）に入学した。学資を得るため、小山内薫、市川左団次の「自由劇場」の舞台背景制作に従事したことから演劇の世界に入り、大正三年（1914）、早稲田卒業後、「芸術座」に移り、舞台美術を担当した。画家としても、第七回文展（1912年）、第一回帝展（1917年）に入選している。1920年、小山内薫がいた松竹美術部に入るが、翌年10月同社を辞し、資生堂意匠部に入社し、ギャラリーのスタッフとなる。
- 15) 和サン = 岩村和雄。明治三十五年（1902）生まれ。学習院を中退し、ヨーロッパ、アメリカに、照明、舞踊を勉強するために留学する。帰国後、帝劇に入り、日本で初めて間接照明を披露した。模型舞台研究所の活動に加わった後、築地小劇場の設立に参加し、俳優たちにリトミックを教えた。一時、九頭竜繡画女学校の教師をした。20歳代後半は、宝塚歌劇団に入った。
- 16) キサチャン = 伊藤熹朔。明治三十二年（1899）生まれ。建築家伊藤為吉の五男。舞踊家・伊藤道郎は兄、千田是也は弟。東京美術学校西洋画科在学中より、模型舞台研究所の同人となり、舞台美術に専念した。後、築地小劇場の設立に加わった。大正十三年（1924）、「ジュリヤス・シーザー」の装置でデビューし、数多くの舞台装置を手がけた。小劇場時代を経て、新劇、新派、

- 歌舞伎、オペラ、舞踊、映画と活躍した。晩年には、ミュージカルを手がけた。
- 17) アサリサン = 浅利鶴雄。明治三十五年（1902）生まれ。慶応大学卒。浅利慶太の父。二代目、市川左団次の甥。演劇プロデューサー、俳優として築地小劇場の設立に参加した。
  - 18) 南湖院 = 茅ヶ崎・南湖の海岸にあった結核療養所。明治三十二年（1899）、高田畔安が設立した。勝海舟未亡人たみ、国木田独歩、坪井譲治らが療養生活を送ったことで知られている。結核となった父の看病をしていた久功は、自身も結核に感染し、この療養所に通っていた。
  - 19) 梅子 = 土方梅子。与志の妻。三島弥太郎（子爵）の次女。通陽（与志の学習院の同級生）の妹。明治三十五年（1902）生まれ。
  - 20) 英子 = 中沢英子。久功の妹。大正十年（1921）12月、中沢佑と結婚する。明治三十五年（1902）生まれ。
  - 21) 帝劇 = 帝国劇場。明治四十四年（1911）に、実業家たちが合資して、東京の都心、丸の内の皇居に面した場所に開いた劇場。従来の“芝居小屋”から大きく飛躍した洋風建築が、客席から廻廊まで西欧の都市にある大劇場を模倣した点で画期的なことであった。専属の歌舞伎俳優として、六代目尾上梅幸・七代目松本幸四郎・七代目沢村宗十郎を招いて、一座を結成し、年に八回ほどの興行を行うほか、女優川上貞奴の養成所で育成された女優に歌舞伎を演じさせ、女形だけが独占していた伝統芸の歴史を変えた。大正中期には、外国から名演奏家や歌劇を招き、日本の楽壇に大きな寄与をした。それにより、この劇場を上流社会の社交場にもしていた。
  - 22) 室田 = 室田蔵三。後、大阪で化粧品会社を立ち上げる。
  - 23) 君子 = 水村君子。とよの妹、園子の姉。後、室田蔵三と結婚する。
  - 24) 下高井戸 = 大正二年（1913）に、京王電車が、笹塚―調布間に開通したときに設けられた駅。
  - 25) 玉川原 = 多摩川原駅。現在の京王相模原線、京王多摩川駅。大正五年（1916）に開通した、京王電車の調布からの支線に設けられた駅。砂利輸送を目的として敷設された。多摩川原停留所からは、馬の引くトロッコ線が多摩川の河原まで延び、採掘した砂利を運んで、貨車に積み込んだ。
  - 26) 園ちゃん = 水村園子。明治四十一年（1908）生まれ。とよ、君子の妹。昭和五年（1930）、後藤禎二と結婚する。
  - 27) 代田橋 = 玉川上水に架かっていた橋。世田谷区大原2丁目と杉並区和泉1丁目を結ぶ。『江戸名所図会』に、「代太橋」とあって、当時、名所として知られていた。現在、暗渠化により消滅。
  - 28) お宮 = 世田谷区大原2丁目にある、「はぐさ稲荷」か。
  - 29) 鎌倉 = 鎌倉・大町に、祖父・柴山矢八の別荘があった。海軍大将だった矢八は、退役後は、この別荘に住んでいた。久功は、幼少の頃からしばしばこの別荘に泊まった。この別荘は、妙本寺に隣接して、広大な敷地があった。また、近くには、昌生叔父一家が住んでいた。
  - 30) 笹塚三十日分 totalsum 8.96 = 笹塚に家を借りるのに、30日間で8円96銭要したということか。
  - 31) 昌ちゃん = 柴山昌道。久功の叔父昌生の長男、矢八の孫。大正四年（1915）生まれ。
  - 32) 秋庭 = 柴田昌生と海軍士官学校で同期（第35期）だった秋庭義次。当時、鎌倉に住んでいた。武はその長男と考えられる。
  - 33) 久顕 = 久功の弟。明治三十四年（1901）生まれ。当時、慶応大学医学部在学。のち、医師、歌人となる。
  - 34) 祖父様 = 久功の母方の祖父、柴山矢八。日清、日露の両戦役で大きな勲功を立て、山本権兵衛とともに、帝国海軍の双壁と称せられた。男爵、元・海軍大将。嘉永四年（1851）生まれ。母は、東郷平八郎侯爵の叔母、妻琴子は、枢密顧問官・本田親雄男爵の長女であった。当時は、既に退役して、鎌倉・大町にある別荘に住んでいた。

- 35) 学校 = 東京美術学校。久功は、当時、彫刻科に在学していた。
- 36) 久保田氏 = 美術学校彫刻科の一年先輩の久保田吉太郎カ。
- 37) 小室 = 小室達。美術学校彫刻科の同級生。後、日展の著名な彫刻家となる。
- 38) 牛屋サン = 山口昇の家の向いにあった井上牧場の人達のこと。牧場で、牛を飼育していたので、「牛屋」と呼んでいたらしい。
- 39) 九十一度 = 摂氏 32.8 度。
- 40) 綾サン = 土方綾子。土方与志（久敬）の義理の姉。与志の父・久明が、与志の母・愛子と結婚する前に、行儀見習いにくいていた米屋の娘との間にもうけた娘。十六歳で、「天下の糸平」と呼ばれた大間屋の田中糸平の息子銀之助に嫁いだが、役者遊びを始め、幸四郎との遊び的な恋愛が評判になって、二十五歳のときに離縁になり、土方家へ返された。その後もまた、土方家に入りしていた人と恋愛し、久元から勘当された（『土方梅子自伝』）。明治十五年（1882）生まれ。当時、茅ヶ崎に住んでいた。
- 41) まりちゃん = 土方綾子と大石茂美の長女。
- 42) まがなすきがな = 間隙。ひまさえあればいつも。ひっきりなしに。
- 43) 母上 = 土方初栄。元・海軍大将、男爵、柴山矢八の長女。昌生の姉。明治十六年（1883）生まれ。
- 44) 鴻の巣 = メイゾン鴻の巣。明治四十三（1910）年、日本橋小網町にオープンした、日本で最初にカフェーと名乗った、と言われている店。フランス料理と美人女給で有名だった。明治末には、「三田文学」「新思潮」の同人等が会合を開き、北原白秋、石川啄木、与謝野鉄幹、小山内薫、永井荷風、木下杢太郎、吉井勇、高村光太郎、谷崎潤一郎や白樺派の文士などが常連で、文士の巣窟となっていた。
- 45) 小山内先生 = 小山内薫。演出家、劇作家、小説家、劇評家。明治十四年（1881）広島生まれ。東京帝大卒。明治四十二年（1909）、二代目市川左団次と自由劇場を興して、演劇改新の旗印を掲げた。大正元年（1912）、渡欧、モスクワ劇場のスタニスフスキー、ドイツ座のラインハルトの影響を受ける。七年、市村座顧問となり、松竹キネマの設立に関与し、九年松竹キネマ研究所所長になる。十二年の大震災後、土方与志の築地小劇場創立に加わり、劇場の経営、演出に専念した。
- 46) 久敬 = 土方与志。久功の父・久路の長兄・久元叔父の孫。父は、久明（明治三十一年7月、ピストル自殺する）。明治三十一年（1898）生まれ。幼少の頃から、久功と親しかった。大正八年（1919）1月、邸内に模型舞台研究所を設立した。演劇を学ぶためにドイツに留学していたが、関東大震災の報を聞き帰国し、その翌年築地小劇場を設立した。
- 47) 資生堂 = 資生堂ギャラリー。大正八年（1919）12月、化粧部二階に陳列場としてオープンした。設立当初の目的は、商品をゆったりとしたスペースで展示販売するものであったが、商品展示のない期間をギャラリーとして使用し、若手作家、前衛芸術家に発表の場を無料で提供した。
- 48) 水谷仲吉 = 舞台美術家。模型舞台研究所の活動に参加。後、築地小劇場設立に加わる。
- 49) 九十五度 = 摂氏 35 度。
- 50) 広子 = 小城広子。小城斉とたか（旧姓・本田）の次女。
- 51) 文子 = 小城広子。小城斉とたか（旧姓・本田）の三女。広子の妹。当時、東京音楽学校在学中。
- 52) 多摩子 = 上原多摩子。久功の祖母（琴子）の妹・少菊と上原伸次郎の長女。
- 53) 五番町 = 麹町区（現・千代田区）にあった町名。江戸時代は武家の屋敷地だった。明治以後は、英国大使館が置かれたほか、政官界人の邸宅が多く、山県有朋の控邸や嘉納治五郎などの居宅があった。昭和十三年、一番町と改称される。
- 54) 小母サン = 小城たか。本田親英の次女、小城斉夫人。
- 55) 菊名 = 三浦半島の宮田台地東部に位置し、東京湾に面する地。現在は、三浦市南下浦菊名。

- 56) 木島 = 木島駒藏。小城齊・たかの長女・武子の夫。明治十八年（1885）、山口県に生れる。東大政治学科を卒業し、朝鮮総督府事務官馬政局書記官、農商務事務官、参事官等を歴任する。
- 57) 梅子叔母様 = 柴山梅子。柴山昌生の妻。園田実徳の六女。明治二十七年（1894）生まれ。
- 58) 直矢叔父様 = 柴山直矢。久功の叔父（柴山矢八の三男、久功の母・初栄の弟）。明治二十六年（1893）生まれ。第43期海軍士官学校卒。士官学校では、久功の妹の夫・佑と同期で親友だった。大正十二年（1923）8月、潜水艦公式試運転中沈没殉職する。
- 59) あの悲しい結婚 = 柴山直矢には、当時結婚を望んでいた女性がいたが、その女性が外国人であったため、結婚を許してもらえなかった。直矢は、その女性と別れさせられたうえ、別の女性（愛子）と、望まない結婚をすることとなった。
- 60) 佑サン = 中沢佑。久功の妹・英子の夫。明治二十七（1894）年、諏訪に生まれる。第43期海軍士官学校卒。士官学校では、柴山直矢と同期で親友だった。直矢の姪（久功の妹）と、大正十年12月23日結婚する。当時、海軍大尉。昭和二十年、ポツダム進級で中将となる。
- 61) 材木座の浜 = 材木座海岸のこと。鎌倉市の南東部に位置し、相模湾に臨む。由比ヶ浜と隣りあって、滑川河口以東、飯島ヶ崎までの約1.5kmの呼称。名前の由来は、中世の商工業者の独占組織の一つである材木座が付近に置かれたことによるという。
- 62) 湯地 = 湯地孝。学習院中等科の同窓生。後、日本近代文学研究者となる。
- 63) 藤原（安場） = 安場保国。末喜（男爵）の四男。明治三十二年（1899）生まれ。学習院中等科の同窓生。後、山陽パルプ副社長となり、久功の仕事のよき理解者となる。
- 64) 由井ヶ浜 = 由比ヶ浜とも書く。相模湾に面した、稲村ヶ崎から材木座までの海岸の総称。現在では、湘南屈指の海水浴場となっている。
- 65) 不二磨 = 本田不二磨。親済（男爵）の長男。大正十一年（1922）、爵位を継承する。久功の祖母、柴山矢八夫人・琴子の甥。明治三十六年（1903）生まれ。
- 66) 捷ちゃん = 島村捷三郎、久功の祖母・琴子の甥。父は島村久、母は米子。昭和四年（1929）、九州大学法学部を卒業し、三和銀行に入る。
- 67) 昌生叔父様 = 柴山昌生。矢八（男爵）の長男。第三十五期海軍士官学校卒。後、海軍少将となる。明治十七年（1884）生まれ。
- 68) 長谷 = 由比ヶ浜のはば中央部に位置する。地名は、地内にある長谷寺にちなむ。明治三十五年（1902）に江ノ島電鉄（江ノ電）長谷駅が開業している。
- 69) 伊達十郎 = 学習院中等科の同窓生。伊達宗徳（侯爵）の十男。明治三十一年（1898）生まれ。
- 70) 烏帽子岩 = 茅ヶ崎海岸から約1,800m沖にある、数個の岩礁からなる姥島のなかの、最大の岩礁。形が、烏帽子に似ていることから名づけられ、茅ヶ崎海岸のシンボルとして親しまれている。
- 71) 鶴沼 = 藤沢市湘南砂丘地帯の東部、境川と引地川の間中に位置する。南は、相模湾に臨む。
- 72) 東海岸の別荘地 = 明治三十年代は、中海岸が別荘地の中心であったが、明治四十年代以降、茅ヶ崎駅の開業とともに、その東側が東海岸別荘として開発された。久功の叔父（父の兄）、久元は、早く明治三十年に、中海岸に広大な別荘を構えた。孫の土方与志（久敬）は、魚市場わきに別荘を持つ実業家伴田六之助の子・友田恭介と二人で、別荘の子供仲間を集め、少年劇団「南湖座」を作り、夏になると、土方別荘裏の土手を舞台にして、地元の高齢者を招いて公演したという。久功も、そこをしばしば訪れた。
- 73) 妙本寺 = 鎌倉市大町1丁目にある、日蓮宗の寺院。山号は長興山。文応元年の創立と伝え、日蓮を開山、日朗を開基とする。寺の規模は、「鎌倉志」では、塔頭16坊、院家2院という大きなものだった。この寺に接して、柴山矢八の別荘があった。
- 74) なめり川 = 滑川。鎌倉市の東部を流れる川。雪ノ下・小町を経て、由比ヶ浜から相模湾に注ぐ。

- 全長約 7.6km あり、旧鎌倉市内では最も大きい川。
- 75) 小壺 = 小坪。逗子市の西北部、相模湾に面する鎌倉市との境に位置する。久功は、材木座海岸から、小坪まで足を伸ばしてよく散歩した。
- 76) 天城山 = 伊豆半島中央部の火山。最高峰は万三郎岳で、標高 1405 メートル。
- 77) 大山 = 丹沢山地の南東部にある、標高 1245 メートルの山。ピラミッド型をした壮年期の山容は、相模平野からよく目立ち、古来農民や漁民の信仰を集め、農業神や海神として信仰対象となってきた。山頂には阿夫利神社奥ノ院（本殿）があり、江戸時代は、大山詣が盛んであった。雨降山、阿倍利山、阿夫利山ともいう。
- 78) 茅ヶ崎館 = 明治三十二年（1899）に開業した、海水浴客向けの旅館。中海岸 3 丁目の海岸近くにあった。
- 79) お末さん = 土方末子。久功の祖父、久元の弟・久規<sup>ひさのり</sup>の妻。久武の母。
- 80) 輝子 = 土方輝子。久規と末子の娘。久武の妹。
- 81) 中沢さん = 中沢佑、英子（久功の妹）夫妻。
- 82) 八幡通 = 鶴岡八幡宮から由比ヶ浜へ一直線にのびる八幡宮の参道、若宮大路のこと。
- 83) 橋 = 大町と小町の境、滑川に架かる夷堂橋。
- 84) 環 = 島村環。島村久と、久功の祖母・琴子の妹、米子との次男。
- 85) 高辻 = 高辻正長。学習院中等科の後輩。宜麿<sup>よしまろ</sup>（子爵）の長男。明治三十六年（1903）生まれ。
- 86) 波多野の小父様 = 波多野敬直<sup>よしのお</sup>。久功の祖母・琴子の妹、島村米子の長女、勝子（波多野二郎に嫁す）の義理の父。司法大臣、宮内大臣を務めた。子爵。嘉永三年（1851）生まれ。
- 87) 祖母上様 = 柴山琴子。矢八の妻。枢密院顧問を務めた、男爵・本田親雄の長女。安政四年（1857）生まれ。大正十年（1921）9月1日没す。
- 88) 木下利玄 = 歌人。明治十九年（1886）生まれ。武者小路実篤、志賀直哉らとともに『白樺』を創刊。大正十一年（1922）結核となり、病床に伏す。大正十四年（1925）2月病没。享年 40 歳。
- 89) 海浜院 = 明治二十年（1887）、由比ヶ浜に創設された海浜サナトリウム。海岸沿いの松林の中に、西洋木造建ての建物で、室数が三十余あった。開院当初は保養施設（サナトリウム）だったが、すぐにホテルに替わり、皇族、華族、政官界の重鎮や外国人等の宿泊客で賑った。明治三十九年（1906）、イギリスの建築家コンドルの設計による建物に建替えられた。
- 90) 園ちゃん = 水村園子。明治四十一年（1908）生まれ。昭和五年（1930）12月、フランス留学を終えて帰国した後藤禎二と結婚する。
- 91) 木山 = 木山豊四郎。美術学校彫刻科の同級生。
- 92) 孝雄 = 上原孝雄。伸次郎と小菊（久功の祖母・琴子の妹）の長男。多摩子の兄。
- 93) 一部改め、「変転を思ふ」と題して、『遺稿詩集』に収載。
- 94) お玉さん = 土方玉子。久功の叔母（父・久路の妹）。十八歳で東久世通敏に嫁すが、家庭教師の森田潔との不貞がもとで離縁し、小石川林町の土方伯爵邸に戻る。後、茅ヶ崎へ移る。明治十一年（1878）生まれ。
- 95) 嘉瑞 = 神山嘉瑞<sup>こうやまかずい</sup>。郡昭（男爵）の長男。母は、本田親英の長女、本田譲二（久功の叔父）の義理の妹・秋子。
- 96) トンビ = 鳶足のこと。（足先の開き具合が鳶が尾羽を広げた格好に似ているところから）足を尻の下にしないで、左右に開いて、その間に尻を落す座り方。
- 97) 小出 = 小出英経。学習院小中等科の同窓生。英尚（子爵）の次男。明治三十一年（1898）生れ。
- 98) 二科 = 二科会。洋画、彫刻の在野美術団体。大正元年頃、文部省美術展覧会第二部の洋画部内で、新傾向の画家たちは、その審査に不満を持ち、第一部（日本画）と同様、新旧二科に分ける運動を起こした。しかし、当局にいられなかったため、有島生馬、石井柏亭等は、

- 大正三年（1914）在野団体として二科会を創立し、同年10月、上野で二科美術展を開いた。
- 大正八年（1919）には、彫塑部を加え、大正・昭和初期には、最有力の在野団体となった。
- 99) 北村西望<sup>きたむらせいぼう</sup> = 明治十七年（1884）、長崎県生まれ。京都市立美術工芸学校を経て、東京美術学校を卒業する。文展で三度受賞する。大正十年（1921）東京美術学校教授となる。大正十四年（1925）、帝国美術院会員となる。ブロンズ人体像を徳意とする
- 100) 建畠大夢<sup>たてはたたいむ</sup> = 明治十三年（1880）、和歌山県生まれ。京都市立美術工芸学校を経て、東京美術学校を卒業する。在学中から文展に出品する。大正九年（1920）東京美術学校教授となる。塑像を得意とし、情熱を含んだ穏かな写実的作風を示す。
- 101) 松元 = 松元泰彦。学習院中等科の同窓生。
- 102) 戸山ヶ原 = 現・新宿区百人町3・4丁目にあった、陸軍所有地。広さ、7町余。明治23年（1890）、陸軍戸山学校により買い上げられたため、後年、戸山ヶ原と呼ばれた。久功は子供の頃、友達と戸山ヶ原へよく遊びに行った。
- 103) 二科会の展覧会 = 第9回展。上の竹の台陳列館で、9月9日から29日まで開催された。
- 104) 平博 = 平和記念東京博覧会。東京府の主催により、「世界の大戦終息を告げたる平和克服」を記念し、および「戦時中勃興したる我国産業の状況を展示し併せて之れが将来の発展に資せんとする」主旨で行われた。大正十一年（1922）3月10日に開会式が挙行政され、7月1日に閉会した。会場は、上野公園で、文展をはじめ、二科展などの在野団体の展覧会が毎年行われているため、博覧会の美術展への出品はあまり多くなかった。
- 105) 警醒社<sup>けいせいしゃ</sup> = 明治十六年（1883）に設立された、キリスト教関係書籍の出版社。超教派の週刊誌『東京毎週新報』（のち、『基督教新聞』と改題）を創刊。編集は、小崎弘道、浮田和民、植村正久が担当し、経営には湯浅治郎があたった。
- 106) 院展 = 再興日本美術院展。大正二年（1913）の岡倉天心の死去を機に、翌三年、横山大観、下村観山が中心となり、活動停止状態にあった日本美術院を再興した。天心の一周忌の9月9日に谷中で開院式を挙行政し、10月、第一回再興院展を開催した。反官展の在野団体として、日本画のほか、洋画部と彫刻部も設けられたが、洋画部は大正九年（1920）に脱退した。
- 107) 倉沢 = 倉沢量世。美術学校彫刻科の後輩。
- 108) 江波 = 江波知彰。美術学校彫刻科の同級生。
- 109) 三角 = 三角泰。美術学校彫刻科の同級生。
- 110) 野間 = 野間政治。美術学校彫刻科の同級生。大正十二年（1923）5月病没する。
- 111) 渋谷の叔父さん = 小城斉と、たかの長女・武子の嫁ぎ先、木島駒蔵。
- 112) ネッキ = 根木。子どもの遊戯の一つ。30~50cmの先のとがった木の棒や釘などを、交互に地面に投げて打ち込み、相手のものを打ち倒した方を勝ちとするもの。ねっきうち、ねんがらなどとも言う。

〔第2冊〕

- 113) 市ヶ谷見附 = 市ヶ谷御門の見附。江戸城々門および見附の一つ。現・千代田区九段北4丁目の西端、JR市ヶ谷駅近く。
- 114) 士官学校 = 明治八年、市ヶ谷台の旧尾張邸内に開校した、陸軍士官学校。戦後は、陸軍自衛隊市ヶ谷駐屯地となる。
- 115) 宇多ちゃん = 山口宇多子。山口昇の妻。明治三十二年（1899）生まれ。中井文治郎、良三郎の妹、惣之助の姉。
- 116) 昇さん = 山口昇。土木学者。明治二十四年（1891）、静岡県に生れる。大正三年（1914）、東大土木工学科卒業。内務技師を経て、同七年（1918）、東大助教授となり、同十五年（1926）、教授となる。当時、世田谷区大原町1127（現・大原1-42）に居住していた。

- 117) 良さん = 中井良三郎。惣之助の兄。久功の兄，久俊と一高，帝大の同級生。
- 118) 大田和の姉さん = 大田和とよ（旧姓水村）。水村君子，園子の姉。
- 119) 帝展 = 帝国美術院美術展のこと。大正八年（1919）9月，帝国美術院規定が公布され，新に帝国美術院が設けられた。これにより，文部省美術展覧会（文展）は，同院主催の展覧会（帝展）に改組された。展覧会の構成は，文展を引継ぎ，第一部絵画（日本画），第二部絵画（西洋画），第三部彫刻となっていた。
- 120) 「高原」= 曠原社のこと。大正十年（1921）12月，帝展系の塑造家，建畠大夢，北村西望等が結成した団体。当時の帝展彫刻部における内部対立を反映した，朝倉文夫等の東台彫塑会に対抗する団体であった。東京西ヶ原の旧農園内に五つのアトリエをもつ研究所を建設し，大正十二年5月に研究所落成記念試作展を開催した。はじめ，年一回の展覧会開催を計画していたが，結局この一回のみで終わった。
- 121) 「東台」= 東台彫塑会のこと。大正八年（1919）11月，朝倉文夫が，東京美術学校彫刻家を卒業した身近な彫刻家たちを集めて結成した団体。大正十年，十二年，十四年と一年おきに，上野竹の台陳列館を会場に三回の展覧会を開催し，一時，美術学校の同窓生350人を擁する大団体となり，建畠大夢，北村西望等が結成した曠原社と大正の官展の彫刻部を二分していた。大正十四年，朝倉文夫の独断的な会の運営に反発して内部対立が起こり解散した。
- 122) 青田 = 青田幸吾。久功の父，久路の後輩であり，親友であった。久路の死後，弟・久頭を援助し，大学を卒業させる。明治五年（1872），福島県生まれ。同二十二年（1889），陸軍幼年学校入学。同二十七年（1894），砲兵少尉となる。大正二年（1913），予備役となり，後，大阪本木鉄鋼取締役となる。市川在住。
- 123) 大妻 = 大妻高等女学校のこと。明治四十一年（1908），大妻コタカは手芸・裁縫の塾を創設し，大正六年（1917）には，麹町に私立大妻技芸学校を開校した。大正八年（1919），高等女学校となった。
- 124) 模型舞台 = 土方与志の小石川林町の邸内に設立した模型舞台研究所。大正八年1月発足。同人には，伊藤熹朔，千田是也，岩村和雄，溝口三郎，和田精，遠山静雄，斉藤佳三，土方久功等がいた。そのほとんどが，築地小劇場の創設に参加した。
- 125) 安本 = 安本亮一。美術学校彫刻科の同級生。
- 126) 杉浦 = 杉浦藤太郎。美術学校彫刻科の1年後輩。
- 127) 足達 = 足達貫一。美術学校彫刻科の1年後輩。
- 128) 海野 = 海野敏。美術学校彫刻科の2年後輩。
- 129) 友達会 = 友達座。学習院高等科在学中の同級生を中心にして作った演劇グループ。メンバーには，土方与志，三島章道，近衛秀麿，有島生馬等がいた。この劇団で，与志は，大正六年（1917），エレノフ「陽気な死」を初演出した。
- 130) 華巖の瀧 = 栃木県日光山中の瀧。高さ約100メートル。中禅寺湖から流れ出て，その末は大谷川となる。日本の三大名瀑の一つ。明治三十六年（1903）5月，18歳の一高生であった藤村操が，ミズナラの木に「巖頭之感」を書き残して投身自殺をして以来，自殺の名所になってしまった。「巖頭之感」には，「曰く『不可解』我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る。」と書かれていた。
- 131) 兎島 = 兎島玖一。美術学校彫刻家の上級生。
- 132) 木内 = 木内五郎。美術学校彫刻家の上級生。
- 133) 十六日・十七日，赤インクで記す。
- 134) 愛子叔母様 = 昌生の弟，本田譲二の妻。
- 135) 山 = 妙本寺に接して建つ，祖父・矢八の別荘のこと。背後に山が迫る台地上に建っているこ

とにより、久功は「山」と呼んでいた。

- 136) ツネサン = 久功が78歳の頃、渋谷の叔父の家に厄介になっていた20歳前後の青年。子供の頃、よく一緒に遊んでもらった(ツネサンについては、「日記」第一冊の最後の頁に記されている)。
- 137) 難波 = 難波常三郎。昌生と海軍士官学校同期の35期卒業生。
- 138) 秋庭 = 秋庭義次。昌生と海軍士官学校同期の35期卒業生。
- 139) 小倉家へ養子の話 = 東郷平八郎の兄・小倉同智の家の相続のこと。結局、この話は成立せず、従妹の柴山綾子(昌生の次女)が跡を継いだ。
- 140) 村田のミノチャン = 村田実。映画監督。明治二十七年(1894)、東京に生まれる。東京高師附属中学に学ぶ傍ら、小山内薫の指導を受け、大正六年(1917)、劇団踏路社を組織し、上演活動を続けたが、大正九年、松竹キネマ創立に際し、小山内に従って入社する。翌年、小山内を中心とする松竹キネマ研究所に加わり、「路上の靈魂」を演出し、芸術性に満ちた日本映画初期の歴史的な作品を残した。研究所解散により、松竹に戻り、さらに国活、日活、新興キネマなどを転々としたが、その間数々の話題作を発表。特に、「清作の妻」「街の手品師」「灰燼」は日本映画開拓時代の力作とされている。
- 141) パーラー = 資生堂パーラーのこと。明治三十五年(1902)、銀座出雲町に、日本で初めてソーダ水やアイスクリームの製造と販売を行うソーダファウンテンとして出発した。
- 142) プランタン = カフェ・プランタン。明治四十四年(1911)、洋画家・松山省三が創設した。客には、画家、文筆家、俳優が多く、芸術サロンの雰囲気があふれていた。
- 143) 讓二叔父様 = 本田讓二。柴山矢八の次男、昌生の弟、直矢の兄。帝大在学中に、母の実家の弟家の名籍を継いで本田姓となる。卒業後、太平生命に勤める(「幼年 B 催眠術」、『同時代』34号所収)。
- 144) 叔母様 = 土方愛子。与志の母。加藤泰秋(子爵)の四女。明治十年(1877)生まれ。明治三十年(1897)、与志の父・久明の2度目の妻となるが、翌年久敬(与志)が生まれた3ヶ月後、夫・久明がピストル自殺を遂げる。そのため、久敬(与志)とともに実家の加藤家へ帰って生活する。その後、与志が小学校へ入学した年の秋、土方久元の養女となって、小石川の久元のもとへ引き取られる。
- 145) 本所 = 現在の東京都墨田区南半部、本所、向島、押上、業平、錦糸、両国などを含む地域。明治期以来、工業地帯を形成し、江東工業地域の中心となる。そのなかで、錦糸町は下町の娯楽街として知られている。
- 146) 岩倉良具 = 岩倉具定(公爵)の六男。明治三十二年(1899)生まれ。後、分家する。
- 147) 芳賀桜 = 久功の母の実家、柴山家に出入りしていた尾上部屋の力士。栃木県出身で、四股名は野州山。久功の祖父母が鎌倉の別荘に移ってからは、土方家に入出入りしていた。久功は、子供の頃、兄弟で芳賀桜、小貝川(弟弟子)の角力を、両国の国技館へ見物に行っていた(「幼年・C 角力」、『同時代』34号所収)。
- 148) 音楽学校 = 東京音楽学校。現・東京藝術大学音楽学部。当時、小城文子、水村君子が在学していた。
- 149) 一部改め、「(帰後暗夜)」と題し、「修学旅行に関する雑稿」(『同時代』34号、68頁)に収載。
- 150) 「小さな窓」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 151) 四谷見附 = 江戸城々門および見附の一つ。寛永十三年、毛利氏により枳形が築かれた。現在の千代田麹町6丁目の西側、JR四谷駅の近く。
- 152) 一部改め、「小窓から来た春」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 153) 一部改め、「修学旅行に関する雑稿」(66頁上)に収載。
- 154) 一部改め、「修学旅行に関する雑稿」(68頁)に収載。
- 155) 一部改め、「修学旅行に関する雑稿」(66下~67頁下)に収載。

- 156) 一部改め, (夢殿秘伝) と題し, 「修学旅行に関する雑稿」(67 頁下) に記載。
- 157) 一部改め, 「修学旅行に関する雑稿」(66 頁下) に記載。
- 158) 一部改め, 「修学旅行に関する雑稿」(68 頁上) に記載。
- 159) 水彩画会 = 日本水彩画会。大正二年(1913) 石井柏亭, 石川欽一郎, 丸山晚霞らによって結成された団体。今日に至るまで毎年公募展を開いている。
- 160) 新光洋画会 = 大正八年(1919), 高間惣七, 牧野虎雄, 片多徳郎らによって創立された団体。この年の第四回展には, 長谷川利行も出品している。大正十三年(1924), 新光洋画会を母体として, 槐樹社が結成される。
- 161) 燕楽軒 = 本郷3丁目の交差点近くにあったレストラン。精養軒の支配人, 妹尾勇吉が大正四年に開業した。建物は三階建てで, 延べ面積は約1,058 m<sup>2</sup>あった。宇野千代が大正六年に一時, 給仕として働いていたことで有名だった。芥川龍之介, 菊池寛, 久米正雄, 今東光等の文化人が客が多かった。昭和初年の不況で廃業した。
- 162) 『遺稿詩集』に記載。
- 163) 一部改め, 「道」と題し, 『遺稿詩集』に記載。
- 164) 千代子叔母様 = 本田千代子。本田讓二夫人, 英昌の母。
- 165) 棕櫚の日 = 棕櫚の日曜日のこと。キリスト教の祭日の一つ。復活祭の直前の日曜日で, エルサレムに入城のイエス・キリストを, ユダヤ人が棕櫚の葉を振りかざして歓迎した日を記念する。
- 166) 敬太 = 土方久敬(与志)・梅子の長男。大正九年(1920) 生まれ。
- 167) 一部改め, 「雑草」と題し, 『遺稿詩集』に記載。
- 168) 綾子 = 柴山綾子。昌生の次女。大正十一年(1922) 生まれ。後, 鹿児島の小倉家を継ぐ。
- 169) 蛇苦死様 = 妙本寺の本堂の西にある蛇苦死堂のこと。
- 170) 癡狂院 = 古く, 精神病院をいった語。
- 171) 扇州園 = 現・扇が谷2丁目にあった農園。久功の親戚・田中銀之助が経営していた。
- 172) 門脇氏 = 門脇正夫。東京美術学校彫刻科の1年先輩。
- 173) 七軒町 = 現・台東区元浅草1丁目。町域の半ばは, 府立第一高等女学校(現・都立白鷗高校)が占めていた。
- 174) 工科 = 東京帝国大学工学部。
- 175) 甘露寺 = 甘露寺方房。義長(伯爵)の次男。学習院初中等科の同窓生。明治33年(1900)生まれ。
- 176) アクション造形美術展覧会 = 大正十一年(1922) 10月, 二科展, 中央美術展などに出品していた神原泰, 中川紀元, 海老原喜之助, 矢部友衛, 古賀春江, 吉田謙吉, 吉邨二郎ら13人によって結成された美術グループ。関東大震災直後には, 建築装飾を手がける「バラック装飾社」を, 今和二郎らの「尖塔社」と協働してつくる試みもした。翌年, 内部に亀裂が起り, 2回展覧会を開いただけで解散した。
- 177) 一部改め, 「修学旅行に関する雑稿」(70 頁下~71 頁下) に記載。
- 〔第3冊〕
- 178) 錦 = 琵琶湖の南岸, 音羽山の東方に位置する, 現在の津市内の地。明治六年, 西ノ庄村と木ノ下村が合併して成立した。明治二十二年(1889), 滋賀郡膳所村の大字となる。
- 179) 「再び高野川の川端を歩いて……」以下, 一部改めて, 「修学旅行に関する雑稿」(72 頁) に記載。
- 180) 忠久 = 中沢忠久。佐, 英子の長男。
- 181) 一部改め, 「望ない春」と題し, 『遺稿詩集』に記載。
- 182) 宮崎 = 明治29年(1896), 宮崎菊が設立した, 宮崎モデル紹介所のこと。
- 183) 杉浦 = 杉浦藤太郎。東京美術学校彫刻科の1年先輩。

- 184) お慶ちゃん = 久功の祖母・琴子の妹・清江の長女、皿井慶子。当時、芦屋在住。
- 185) 春陽会 = 大正十一年（1922）1月、足立源一郎、梅原龍三郎、倉田白羊、小杉未醒、長谷川昇、森田恒友、山本鼎を創立会員として、ほかに客員として、石井鶴三、岸田劉生、木村莊八、椿貞雄、中川一政、萬鉄五郎等が参加して結成され、翌年5月に、第一回展を開催した。会員、客員の構成をみると、大正九年、日本美術院洋画部を脱退した小杉等と、草土社のメンバーが合流したかたちとなっている。したがって、出品作品は、油彩画のみでなく、水墨画や素描もあった。
- 186) 曠原社の記念展覧会 = 曠原社が、東京西ヶ原の旧農園内に五つのアトリエをもつ研究所を建設したことを記念して大正十二年5月に開催した、「研究所落成記念試作展」。はじめ、年1回の展覧会開催を計画していたが、結局この1回のみで終わった。
- 187) 文化村 = 目白文化村。大正期・昭和期にあった郊外住宅地。現在の新宿区中落合3・4丁目を主にした地域一帯。大正三年（1914）、堤康次郎が、下落合の大地主から2,667坪を購入し、さらに周辺の土地を入手した。大正十一年（1922）6月、目白不動園として住宅地の土地分譲を開始し、翌年には第二文化村、翌々年には第三文化村、大正十四年（1925）には、第四文化村、昭和四年（1929）には、第五文化村を分譲した。
- 188) 二七の縁日 = 千代田区表六番町の二七不動院を中心に二七通り（三番町通り、表六番町ともいう）に、2と7のつく月6日に開かれた縁日。金魚屋、飴屋、二十日鼠屋、虫屋、植木屋など様々な夜店が出て、近隣の人々の娯楽として盛大に行われた。幼時、久功は、その縁日をいつも楽しみにしていた。震災、戦災などによる一時的な中断はあったものの、縁日は昭和30年代まで続いていた（『幼年時代・D 二七通りと遊び』、『同時代』34号所収）。
- 189) わかもの座 = 友田恭助が、新協劇団の公演「青い鳥」で共演した、水谷八重子、夏川静江らを誘って、大正九年（1920）12月につくった劇団（はじめは、「師走会」であったが、後「わかもの座」と改める）。小石川関口台町にあった伴田家の土地に野外舞台を作り、坪内逍遙の作品を上演した。その後、鉄道協会講堂、報知講堂でも公演した。「わかもの座」は、回を重ねて公演したが、大正十二年（1923）の関東大震災で解散した。その後、友田は、築地小劇場の設立に加わった。
- 190) 自然園 = 大正四年（1915）頃、岡見彦蔵が、青少年の健全育成には、大自然に親しむことが欠かせないと考え、自分の農場を一般開放して作った憩いの場。現在の目黒区中目黒5丁目にあった。中央には手入れの行き届いた芝生が張られ、自由に運動や遊戯ができ、茶屋や藤棚の下には、食事や休憩のためのベンチやテーブルが多数用意されていた。又、広場の東には、野菜やイチゴの畑がひろがり、即売されていた。ヤギも放飼いされ、その乳も飲めた。都会に住む人の憩いの場として賑っていたが、関東大震災後の大正十四年（1925）に閉園となり、宅地として売り出された。
- 191) 三緑亭 = 芝公園内にあった西洋料理店。フランス公使・鮫島伯爵に随行してパリに行き帰朝した小城久治郎が、明治十四年（1881）11月に開業した。三緑山増上寺にちなんで、三緑亭の名をつけた。明治二十六年（1893）に、芝公園内の別の地に、敷地500坪、家屋116坪の木造二階の西洋館の新館を作った。さらにその後、公園内の別の地に移転した。150名を収容でき、政官財界人、文学者、芸術家等が客となっていた。
- 192) 一部改め、「静寂の朝」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 193) 東郷の伯父様 = 東郷吉太郎。慶応2年（1866）鹿児島生まれ。海軍士官学校（第13期）卒。大正元年（1912）少将になる。同5年（1916）中将になり、臨時南洋群島防備隊司令官に任ぜられる。
- 194) 海野 = 海野敏。東京美術学校彫刻科の三年後輩。

- 195) 佐伯 = 佐伯祐三。明治三十一年（1898）、大阪の光徳寺の住職・祐哲の次男として生れる。府立北野中学四年から油絵を始め、赤松麟作に学ぶ。大正六年（1917）上京し、川端画学校洋画部で藤島武二に師事する。東京美術学校を卒業し、大正十二年（1923）、渡仏。翌年パリのグラン・ショーミエールの自由科へ通うが、里見勝蔵とヴラマンクを訪ね、フォーヴの洗礼を受ける。大正十五年（1926）帰国し、里見らと一九三〇年協会を結成する。第一回展に『マルシャル・ド・クール』などを発表する。同年二科展に『レ・ジュ・ド・ノエル』など19点の特陳し、二科賞を受賞する。昭和二年（1927）再渡仏するが、翌年8月、パリ郊外の入院先で客死した。
- 196) 有島武郎 = 明治十一年（1878）、東京小石川に生まれる。有島生馬・里見弴は弟。学習院初等科・中等科を経て札幌農学校卒業。在学中に基督教に入信。三十六年（1903）、アメリカ留学し、歴史と経済学を専攻したが、信仰に動揺をきたし、学問にも興味を失い、文学に興味を持つ。三十九年（1906）、ヨーロッパに渡る。ホイットマン、クロボトキンの影響を受け、翌年帰国した。翌四十一年（1908）、母校農科大学の英語教師として、札幌に赴任。四十二年、神尾安子と結婚するが、その前後から信仰に対する懐疑を一層深め、翌年札幌独立教会を脱退するとともに、武者小路実篤等によって創刊された『白樺』に加入し、文筆活動を開始する。この時期の代表作に『或る女のグリンプス』『お末の死』などがある。大正三年（1914）上京し、妻の看病と育児のかたわら、『宣言』などを発表し、五年（1916）8月に妻を、12月に父を相次いで病気で失うとともに、翌年から本格的作家活動に入り、力作を発表し、一躍人気作家となる。『死と其の前後』『カインの末裔』『クララの出家』『生れ出づる悩み』『石にひしがれた雑草』など、他の追従を許さぬ作風を確立した。その後も、戯曲、評論でも活躍し、若い知識人をひきつけ、文壇外でも特異の地位と名声を獲得した。しかし、第一次世界大戦後の深刻な社会矛盾の状況を前にして、思想的に行き詰まりに陥り、打開策として、財産放棄、有島農場の解放などを行ったが、根本的解決とはならず、最後は絶望のうちに、大正十二年（1923）6月、婦人公論記者で人妻の波多野秋子と軽井沢の別荘で情死を遂げた。

## 〔第4冊〕

- 197) 吉野の二郎ちゃん = 吉野二郎。洋画家。明治三十二年（1899）生まれ。二科展に洋画を出品していたが、大正十一年（1922）10月、神原泰ら13人で美術グループ、アクションを結成する。大正十四年（1925）には、浅野孟府、神原泰、吉田謙吉ら11人で、「造形」を結成した。
- 198) 吉田の謙ちゃん = 吉田謙吉。美術家。明治三十年（1897）生まれ。東京美術学校図案科を卒業。二科展、中央美術展に洋画を出品していたが、大正十一年（1922）10月、神原泰ら13人で美術グループ、アクションを結成する。大正十四年（1925）には、浅野孟府ら11人で「造形」を結成した。大正十二年（1923）、今和次郎と風俗調査を行い、考現学をおこす。大正十三年（1924）、築地小劇場の創立に参加し、旗揚げ公演『海戦』の美術を担当した。
- 199) 招魂社 = 千代田区九段北三丁目にある、靖国神社のこと。明治二年（1869）に、明治天皇の意思で創建された。伊勢神宮・春日大社に継ぐ一萬石の社領を永代祭祀料として与えられた。明治十二年（1879）、靖国神社と改称された。
- 200) 一部改め、「ひなたの毒百合」と題して、『遺稿詩集』に収載。
- 201) 海浜博覧会 = 大正年間、毎夏鎌倉の海岸で開かれていた催し。“博覧会”と名うっていたが、縁日の夜店程度のもので、夜は夕涼みの浴衣がけの人々で賑っていた。
- 202) 島村さん = 久功の祖母・琴子の妹・米子の嫁ぎ先。米子の夫は、島村久（鴻池銀行総理事）。
- 203) 武さん = 土方久武。久功の従兄（久功の父・久路の兄・久規の長男）。明治三十一年（1898）生まれ。幼少期、小石川の久元邸に住む。東京外国語学校を卒業し、手に職をつけようと、大工修業をする。当時、茅ヶ崎の別邸に住む。大正十三年（1924）、箱根竜禅寺で得度出家する。

- 204) 霊岸町 = 現在の江東区白河1・3丁目, 平野1~2丁目, 三好1~3丁目のうち。寛永四年(1627)にこの地に建立された霊岸寺に由来する。
- 205) 一部改め, 「薄闇」と題し, 『日本詩人』第5巻第4号(大正十四年4月発行)に掲載。
- 206) 山田耕作 = 明治十九年(1886), 東京生まれ。東京音楽学校卒。ベルリン高等音楽学校でブルッフらに師事。大正四年(1915), 東京フィルハーモニー会に管弦楽部を創設, 指揮。七年, 渡米, カーネギー・ホールで自作管弦楽曲を指揮する。九年, 日本楽劇協会を創立, ドビュッシーの『放蕩息子』などを初演。十四年, 日本交響楽協会を正式に組織した。
- 207) 広子 = 吉峯広子。小城斎, たかの次女。吉峯秀雄に嫁す。
- 208) 明治座 = 明治の初め, 小芝居の小屋だったのを, 両国広小路の見世物の金主だった人たちが買収して, 当時の久松町に建てた劇場。初め, 喜昇座といい, やがて久松座と改称した。その後, 千歳座と改称し, 明治十八年(1885)に建てた劇場には, 新富座主の12代守田勘弥の応援を得て, 9代目市川団十郎・5代目尾上菊五郎・4代目中村芝翫・初代市川左団次も出て, 座格も向上した。しかし, 火災にあい, 廃座の危機にひんしたのを, 左団次が私財を投じ再建, 一時日本橋座と称したが, 明治二十六年, 明治座と改称した。初代没後, 2代目左団二が座主となる。
- 209) 左団次 = 2代目市川左団次。明治十三年(1880)~昭和十五年(1940)。東京築地に, 初代の長男として生まれる。明治三十七年(1904), 初代の死とともに, 経営していた明治座を引き継ぐ。明治三十九年(1906), 左団次を襲名。同年12月, 渡欧し, 翌年8月の帰国後, 小山内薫とともに, 「自由劇場」を興し, 翻訳劇や新作劇を多く演じた。その他, 岡本綺堂らによる新作歌舞伎の上演や鶴屋南北作品の復活などの活動は, 歌舞伎界に革新をもたらした。
- 210) 七草会 = 左団次の脚本審査会。大正十年(1921)1月, 左団次は日本橋の料亭に, 岡本綺堂, 永井荷風, 岡鬼太郎, 松居松葉, 池田大伍等の劇文学者と一門の俳優を招いた上, 別興行で新劇を上演するよりも, 毎月会を開いて適当な作品の推挙を仰ぎ, それを普通興行として上演していきたいと考えを述べた。小山内薫は, 同年3月, 明治座で, 七草会推薦の『俊寛』(倉田百三作)や『夜網誰白魚』(永井荷風作)を演出した。
- 211) 綾さんの事件 = 役者遊びがもとで, 25歳のとき, 田中銀之助と離縁になって, 土方家に戻っていた綾子(土方与志の義理の姉)が, 土方家に入出入りしていた人と起こした恋愛騒動のこと。これにより, 綾子は, 祖父・久元から勘当され, 茅ヶ崎に住むことになる。
- 212) 友秋 = 江波知彰のこと。
- 213) 突然乗組の潜水艦と一処に, 仮屋の沖に沈んでしまひました = 神戸の川崎造船所で竣工した中型潜水艦七〇号が, 公試運転のため潜航中の8月22日, 淡路・仮屋沖で沈没した事故。海軍側・造船所側, 合わせて88名が死亡した。船体が, 35尋の深い海底に沈んでいたのと, 激しい潮流のため引上げ作業は難航し, 約2カ月後の10月18日になって, 船体が引き揚げられた。殉職した叔父の柴山直矢は, 当時海軍大尉だった。
- 214) 九十度 = 32.2度C
- 215) 首相加藤男 = 加藤友三郎。軍人, 政治家。文久元年(1861)広島生まれ。海軍大卒。連合艦隊参謀長として日露戦争の際には, 日本海海戦に参加する。大正四年(1915), 第2次大隈内閣の海軍大臣となり, 寺内, 原, 高橋各内閣に留任する。大正十一年, 政友会の支持を得て組閣し, 海軍軍縮を実現したほか, 行政整理にも力を入れた。また, シベリア出兵中の軍隊撤兵も行った。
- 216) 元 = 島村元。久と米子(久功の祖母・琴子の妹)との長男。
- 217) 女子学院 = 明治三年(1870), ジュリア・カロゾルスにより設立されたA六番女学校に始まるキリスト教主義の学校。明治二十三年(1890), 校名を女子学院として, 現在地・千代田区

- 一番町に移る。
- 218) 薬学校 = 現・明治薬科大学。明治三十五年（1902）、東京薬学専門学校として発足。大正八年（1919）、中六番町に明治薬学校校舎を新築移転し、大正十一年（1922）、明治薬学専門学校と改称した。
- 219) 砲兵工廠 = 陸軍砲兵工廠。徳川幕府が、小石川関口に設けた河川利用動力による銃砲火薬類の製造修理工場、関口製造所を起源としている。明治十二年（1879）、砲兵工廠条例の制定に基づき、東京砲兵工廠を創設した。ここで、陸軍の兵器弾薬等の製造修理が行われた。
- 220) 大橋図書館 = 明治三十五年（1902）6月、上六番44番に、大橋佐平（博文館社長）により設立された財団法人の図書館。佐平の死後は、嗣子・新太郎がこの図書館を充実させた。
- 221) 田浦 = 三浦半島北東部、横須賀の西北に位置する（昭和八年、横須賀市の一部となる）。当時は、海岸地帯は海軍用地で、海軍の大倉庫群が形成され、田浦・長浦にまたがる海岸から沖合にのびる箱崎半島には、軍艦の燃料庫、火薬庫が設けられ、同半島の長浦湾側は、駆逐艦の停泊地になっていた。
- 222) 川上の伯父様 = 川上親恒。本田親雄（男爵）の三男。久功の祖母・琴子の弟。川上親民の家を嗣ぐ。明治元年（1868）生まれ。
- 223) 矢来町 = 現・新宿区の東部にある地。
- 224) 河上肇 = 明治十二年（1879）、山口県生まれ。明治三十五年（1902）、東京帝国大学政治学科卒。卒業後、東大講師として、農政学を講義。「日本尊農論」（1905）、「日本農政学」（1906）などで、政府の商工立国論を激しく批判し、農・工・商併進鼎立のリスト的保護主義政策を提唱した。明治四十一年（1908）、京大講師となり、経済史を担当する。翌年助教授、大正四年（1915）、教授となる。大正六年（1917）に刊行した『貧乏物語』は、文明社会の貧困を経済学的に明快に説明して、多大の影響を与えた。
- 225) 本田サン = 祖母・琴子の実家、本田親濟（男爵）の家。
- 226) R・U・R = “ロッサム万能ロボット会社”の略。
- 227) 遠山五郎 = 洋画家。明治二十一年（1888）、福岡県生まれ。東京美術学校西洋画科に入学し、第五回文展にフォーヴの傾向の「早稲田」で初入選する。大正三年（1914）、美術学校を卒業し、渡米。ニューヨークのナショナル・アカデミーなどで学ぶ。九年（1920）渡欧し、アカデミー・ジュリアン、アカデミー・コラッシに学び、ピエール・ゲランに師事。十一年（1922）帰国し、同年の第四回帝展に「読書」を出品して特選となる。中村彝らとともに新宿中村屋で他の画家たちと交友し、セザンヌ研究を根底とする画面構成と洗練された色彩と技法で新風を吹き込んだ。帝展には大正15年まで、光風展には翌年まで出品を続けた。大正十一年（1922）に肋膜炎を患って以後健康がすぐれず、昭和三年（1928）2月死去。
- 228) 由利正通 = 学習院中等科の同窓生。公通（子爵）の次男。明治三十二年（1899）生まれ。後、貴族院議員となる。
- 229) 練兵場 = 駒沢練兵場のこと。明治三十年（1897）に設置された。現在の目黒区、世田谷区にまたがる広大な敷地をもつ練兵場であった。
- 230) 久元伯父 = 土方久元。天保四年（1833）生まれ。久功の父・久路の長兄。明治の元勳として知られた、伯爵。元・土佐藩士で、三条実美の信任が篤く、維新に際には、薩長連合に努力した。明治政府では、農商務大臣、宮内大臣等を歴任した。小石川林町に2万坪の屋敷を持ち、久功兄弟は、幼少の頃よく遊びに行った。
- 231) 上原の叔母様 = 久功の祖母・琴子の妹・小菊。上原伸次郎に嫁ぐ。
- 232) 孝雄 = 小菊と上原伸次郎との長男。
- 233) 千代子叔母様 = 本田千代子。久功の叔父・本田讓二（旧姓・柴山。本田親雄の弟の家を相続）の妻。

- 234) 中井サンの兄サン = 中井文治郎。
- 235) 知治 = 江波知治。知彰の弟。
- 〔第5冊〕
- 236) 香蘭女学校 = 明治二十一年(1888)4月、英国教会のピカステス主教によって設立された女学校。明治三十六年(1903)に第一回バザーを開催し、以後、今日まで続く。大正元年(1912)、芝白金三光町に移転する。
- 237) 九頭竜女学校 = 明治末、九頭竜千松が創設した九頭竜繡画女学校のこと。大正九年(1920)、渋谷から上目黒へ移転した。演劇、音楽活動に力を入れ、芸術座の『青い鳥』の公演のさいには、「黄泉の国」の妖精の踊りを学校のバレエチームが賛助出演するなど、その活動は高く評価されていた。築地小劇場の創設に加わった岩村和雄も一時教師をしていた。昭和十三年(1938)閉校となった。
- 238) 竹田 = 竹田与作。美術学校彫刻科の同級生。
- 239) 江知勝 = 明治四年頃、湯島で越後屋勝治郎が始めたすき焼きの店。
- 240) 久敬が帰ってき来た = 大正十一年(1922)11月、土方与志は、演劇の研究のため、ヨーロッパへ旅立った。パリに滞在した後、翌年ベルリンへ移り、観劇に精を出すとともに、カール・ハイネから劇団史や演出論を習い、アルトゥール・ライヒから演出の実際を学んだ。しかし、関東大震災の報を聞いた与志は、留学を切り上げ、残った資金をもとに、焦土と化した東京に、興行資本に毒されない理想的な小劇場と、それに付属する実験的、研究的小劇団を創ろうと決心し、シベリア鉄道経由で帰国した。
- 241) 勝ちゃん = 上原勝雄。上原伸次郎(海軍少将)、少菊の次男。
- 242) 春ちゃん = 上原春子。伸次郎、少菊の四女。
- 243) 木島 = 小城斉と本田親英の次女・「たか」との長女・武子の嫁ぎ先。
- 244) 上原 = 久功の祖母・琴子の妹・小菊の嫁ぎ先。
- 245) 園池 = 園池公功。公静(子爵)の次男。演出家・評論家。明治二十九年(1896)生まれ。京都帝国大学卒業後、1922年、帝国劇場に入社し、文芸部で演出を担当する。のち、松竹や東宝に勤務する。
- 246) おとしさん = 美術学校彫刻家の後輩、海野敏か。
- 247) 六日の条、冒頭からここまで棒線で抹消する。また、次の一枚破棄されたと考えられる。
- 248) 多久寅 = ヴァイオリン奏者。東京音楽学校教授。明治十七年(1884)生まれ。山田耕筰の友人。
- 249) 川路柳虹 = 詩人、美術評論家。本名、誠。明治二十一年(1888)、東京に生まれる。東京美術学校日本画科卒。明治四十年(1907)、「詩人」誌上に「新詩四章」を発表し、その一編『塵溜』は口語自由詩の先駆的作品として反響を呼ぶ。大正六年(1917)、詩話会を結成。翌年には、曙光社を創立した。数多くの校歌を作詞した。
- 250) 一部改め、「隅」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 251) 村山知義 = 劇作家、演出家、美術作家。明治三十四年(1901)、東京に生まれる。東京帝大を中退し、大正十一年(1922)、ドイツに留学する。表現主義などの影響を受け、翌年帰国し、前衛美術団体マヴォを結成する。大正十三年(1924)、築地小劇場で上演した、「朝から夜中まで」の舞台美術を担当する。
- 252) 一部改め、「雨夜」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 253) 浅間 = 明治三十二年(1899)竣工した装甲巡洋艦。日露戦争の日本海海戦に参戦した。
- 254) 園田 = 昌生夫人・梅子の実家。
- 255) 一部改め、「弟の机」と題して、『遺稿詩集』に収載。
- 256) 一部改め、「無題」と題し、『遺稿詩集』に収載。

- 257) 中川久順<sup>ひさもと</sup> = 学習院小中等科の同窓生。久任（伯爵）の長男。明治三十三年（1900）生まれ。
- 258) 合同展覧会 = 復興記念合同彫塑展。上野竹の台陳列館で、5月3日から18日まで開催した。久功は、「小さなブロンズ的首」を出品した。
- 259) 松方義三郎 = 松方三郎。学習院の同窓生。正義（公爵）の14男。ジャーナリスト、日本山岳会会長、随筆家。明治三十二年（1899）生まれ。
- 260) 一部改め、「失題」と題し、『遺稿詩集』に収載する。
- 261) 本郷座 = 文京区本郷3丁目にあった、新派、歌舞伎等を上演していた劇場。明治六年（1873）、本郷春木町に本郷の地主・奥田氏が奥田座を設立したのが初め。明治九年（1879）、町名をとり春木座と改称し、明治三十五年（1902）、区名から、本郷座と改めた。新派の川上音次郎・貞奴一座が「ハムレット」を上演して連日札は売切れ、新派全盛の原動力となった。明治四十三年（1910）、松竹に経営が移り、大正初期には2代目市川左団次の新歌舞伎、新派、新劇などが交互に上演された。昭和五年（1930）、松竹の映画館となり、昭和二十年（1945）、戦災で消失した。
- 262) 久松定武<sup>さだたけ</sup> = 久功の学習院初中等科の同窓生。定謨（伯爵）の長男。明治三十二年（1899）生まれ。貴族院議員、愛媛県知事等を務める。
- 263) 松平矯<sup>たけし</sup> = 久功の学習院初中等科の同窓生。頼和（子爵）の三男。明治三十二年（1899）生まれ。〔第6冊〕
- 264) 一部改め、「黒子」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 265) 光風会 = 明治四十四年（1911）に白馬会が解散した翌春、白馬会出品作家や黒田清輝の薫陶を受けた作家、中沢弘光、山本森之助、三宅克己、杉浦非水ら七人の発起により結成された会。6月に、第一回展を開催し、以来今日まで活動を続けている。
- 266) 六年会 = 大正六年3月、学習院中等科卒業生の同窓会。
- 267) 桜川 = 利根川水系の支流で、鏡ヶ池を水源とし、筑波山西麓一帯等を流域とし、土浦市街地に入り、霞ヶ浦に流入する。古来、桜川を詠んだ歌は多く、世阿弥清元の謡曲「桜川」の舞台として知られている。
- 268) 一部改め、「影」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 269) 海戦 = 第1回公演（6月14~18日）。ラインハルト・ゲーリング作、伊藤武雄訳、土方与志演出。吉田謙吉装置・衣裳。和田精効果・配光。汐見洋（第一の水兵）、千田是也（第二の水兵）、竹内良作（第三の水兵）、東屋三郎（第四の水兵）、友田恭助（第五の水兵）、藤輪和正（第六の水兵）、吉田謙吉（第七の水兵）等出演。表現派様式演劇の本格的な初上演。なお、築地小劇場の公演演目、キャスト、スタッフに関しては、水品春樹著『新劇去来』（1971年、ダヴィッド社）を参照した（以下同じ）。
- 270) 白鳥の歌 = 同上。チェーホフ作、浅利鶴雄訳、小山内薫演出。汐見洋（ワシリイ）、小堀誠（同）、東屋三郎（ニキイタ）出演。
- 271) 休みの日 = 同上。エミール・マゾー作、小山内薫訳・演出。宮田政雄装置、和田精効果・配光。小堀誠（主人）、汐見洋（主人の友人）、田村秋子（女中）、東屋三郎（隣人）、竹内良作（牛乳屋）等出演。
- 272) 秋田雨雀 = 明治十六年（1883）、青森に生れる。早稲田大学英文科卒業。小説から劇作に移って、『埋れた春』ほかを発表。社会主義思想に近づき、先駆座を捨て、昭和九年（1934）、新協劇団の結成に参加する。
- 273) 小堀 = 小堀誠。明治十八年（1885）東京に生まれる。本名・堀江鎌太郎。明治四十一年（1908）新富座で「女夫波」の火の番で認められる。伊井蓉峰一座に転じ、小堀誠を名乗る。大正九年（1920）、河合武雄一座に加わり、花柳章太郎らと新劇座を作る。築地小劇場創設時には、

演技部客演として、第1回公演に出演する。

- 274) 汐見 = 汐見洋。築地小劇場演技部員。もと研究座に属していたが、小劇場創設時同人となる。
- 275) 片柳茂 = 学習院小中等科の同窓生。
- 276) 「狼」 = 第2回公演（6月21~25日）。ロマン・ロラン作、高橋邦太郎訳、土方与志演出。宮田政雄装置、小堀誠（ケネル）、青山杉作（ツーリエ）、汐見洋（ドワロン）、東屋三郎（ヴェラ）、千田是也（イダロ）、友田恭助（スパイ）等出演。フランス革命に材を求めた作品。
- 277) 人造人間 = 第5回公演（7月12~16日）。カール・チャベック兄弟作、宇賀伊津緒訳、土方与志演出。宮田政雄装置・衣装。汐見洋（ドオミン）、夏川静江（スラ）、丸山定夫（マリウス）、山本安江（ヘレナ）等出演。
- 278) 一部改め、「薔薇」と題し、『遺稿詩集』に収載。
- 279) 『遺稿詩集』に収載。
- 280) 『遺稿詩集』に収載。
- 281) 『遺稿詩集』に収載。
- 282) 天鵝絨の薔薇 = 第8回公演（8月2~6日、第6回公演の再演）。一幕もの3本のうちの一つ。ノブローク作、小山内薫訳・演出、宮田政雄装置。山本安英（モッス）、夏川静江（アンニイ）等出演。
- 283) 死せる生 = 同上。一幕もの3本のうちの一つ。ヒルフェルト作、小山内薫訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。
- 284) 新夫婦 = 同上。一幕もの3本のうちの一つ。ピヨルン作、小山内薫訳・演出。宮田政雄装置。
- 285) アルト・ハイデルベルヒ = 「思ひ出」。第9回公演（夏季臨時公演 8月9~18日）。マイヤー・フェルステル作、松居松葉訳、土方与志演出、溝口三郎装置。友田恭助（王子）、田村秋子（ケティ）、青山杉作（ユットナー）等出演。
- 286) 一部改め、『遺稿詩集』に収載。
- 287) 『遺稿詩集』に収載。
- 288) 大内氏 = 大内青圃。明治三十一年（1898）東京に日本画家大内青巒の息子として生まれる。幼時より、父に仏教、篆刻、兄・青坡から絵画を学んだ。大正十一年（1922）、東京美術学校彫刻科木彫部を卒業後、高村光雲に木彫、水谷鉄也に塑像を学ぶ。大正十三年（1924）、第十一回再興院展に「羅刹婆」が初入選し、昭和二年、同人となる。
- 289) 邦楽座 = 明治四十一年（1908）秋、有楽町に開場した、日本で最初の洋風劇場。当初、「有楽座」の名称だった。
- 290) 吉右エ門 = 初代・中村吉右衛門。明治十九年（1886）、三代目・中村歌六の次男として、浅草に生れる。父・歌六ゆずりの上方風の芸風に、九代目・市川團十郎系の近代的な演技を加えた独自の雰囲気をもつ名優として、高い評価を得た。大正十二年、小山内薫の三男・蕎（中村辰之助を名乗る）を入門させ、話題を呼んだ。
- 291) お夏狂らん = 坪内逍遙の新作舞踊劇。1662年、姫路の宿屋但馬屋の娘お夏と手代清十郎とが、駈落ちしようとして捕らえられ、その上金子紛失の嫌疑で、清十郎は死刑、お夏は発狂したという「お夏清十郎」を脚色したもの。これを脚色したものに、他に、井原西鶴の「好色五人女」の第一話、近松門左衛門の人形浄瑠璃「五十年忌歌念仏」等がある。
- 292) 「瓦斯」第一部 = 第10回公演（9月2~11日）。ゲオルク・カイザー作、黒田礼二訳、土方与志演出。友田恭助（書記）、汐見洋（白い紳士）、千田是也（技師）、竹内良作（労働者）、青山杉作（富豪）、生方賢一郎（士官）等出演。『海戦』に続く表現派演劇。
- 293) 築地に行く = 当日は、第11回公演（9月15~24日）が行われていた。演目は、「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」。イブセン作、森鷗外訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。青山杉作（ボ

- ルクマン), 田村秋子 (グンヒルド), 友田恭助 (エルハルト), 山本安英 (レントハイム) 等出演。
- 294) 一部改め, 『遺稿詩集』に収載。
- 295) 「どん底」(夜の宿) = 第13回公演 (10月15~24日)。ゴロッキー作, 小山内薫訳・演出, 溝口三郎装置。東屋三郎 (木賃宿の主人), 室町歌江 (その妻, ワシリーサ), 山本安英 (その娘, ナターシャ), 生方賢一郎 (巡査メドヴェージェフ), 千田是也 (ペーベル), 汐見洋 (男爵), 丸山定夫 (ルカ), 花柳はるみ (ナースチャ) 等出演。
- 296) 「作者を探す六人の登場人物」= 第14回公演 (10月25~27日)。ピランデルロ作, 本田満津二訳, 土方与志演出。父親が腹違いの娘を買うという箇所がいけないというので, 一般公開の許可が下りず, 非公開の会員制による試演という形をとった。
- 297) 総寧寺 = 現・里見公園内にある寺。山号は安国山。江戸期には, 下野大中寺・武蔵竜徳寺とともに関東総録司の一つで, 曹洞宗寺院住職の任免を司っていて, 末寺は四十四カ寺を数えた。
- 298) 練兵場 = 東練兵場および陸軍射撃場, 西練兵場。当時, 国府台には, 野戦重砲兵第三旅団が置かれていた。
- 299) 「恋愛三昧」= 第15回公演 (11月1~10日)。シュニッツレル作, 森鷗外訳, 青山杉作演出, 溝口三郎装置。竹内良作 (フリック) 等出演。ウイーンを舞台にした恋物語。
- 〔第7冊〕
- 300) 一部改め, 「何も云はない」と題し, 『遺稿詩集』に収載。
- 301) 一部改め, 「六つの彫像」と題し, 『文化の果にて』に収載。
- 302) 「一人舞台」(強者) = 第16回公演 (11月15~24日)。森鷗外訳。小山内薫演出, 溝口三郎装置。室町歌江 (夫のある女優), 田村秋子 (夫なき女優) 出演。
- 303) 「稲妻」= 森鷗外訳。小山内薫演出, 溝口三郎装置。青山杉作 (主人), 山本安英 (ルイゼ), 花柳はるみ (ゲルダ) 等出演。
- 304) 桃園 = 現・中野区中野3丁目。
- 305) 和子サン = 神山嘉瑞夫人。毛利元次 (子爵) の次女。明治三十五年 (1902) 生まれ。
- 306) 青田サンの普請場 = 本郷区駒込上富士前町126。後, 青田家は, 当地へ引き移る。
- 307) 「朝から夜中まで」= 第17回公演 (12月5~20日)。カイザー作, 北村喜八訳。土方与志演出, 村山知義装置・衣裳。千田是也 (出納係), 吉野光枝 (母), 山本安英 (妻), 田村秋子 (第一の娘), 若宮美子 (第二の娘), 丸山定夫 (頭取), 友田恭助 (助手), 原田理一 (門番), 生方賢一郎 (第一の紳士) 他出演。表現派の代表的作家の作品。演劇とともに, 村山知義のデザインした構成派舞台装置は, 大きな反響をよんだ。初の16日間興行で, 観客数がはじめて4,000人を越えた。
- 308) 小野宮吉 = 築地小劇場演技部研究生。後, 大正十五年 (1926), 築地小劇場を去り, 前衛座の創立に参加。また, マルクス主義芸術研究会の結成に加わり, 音楽部の委員となる。
- 309) 高橋邦太郎 = 築地小劇場文芸部員。明治三十一年 (1898) 東京生まれ。東京外国語学校, 東京帝国大学仏文科卒。戯曲の他, フランス大衆小説などを翻訳する。
- 310) 八代 = 八代康。築地小劇場効果部員。
- 311) 千早 = 千早正寛。小山内薫の知人。経営部の浅利鶴雄が, 築地小劇場開場後間もなく病気となったため, かわりに経営主任として築地小劇場に入った。
- 312) 「子供の日」= 第18回公演 (12月23~29日, 翌年1月3~7日)。演目は, パントマイム「遠くの羊飼」, ハドソン作, 小山内薫・岩村和雄共同演出。舞踊「蝙蝠座の印象」, 岩村和雄振付。「そら豆が煮えるまで」, スチュアート・ウォーカー演出。舞踊「おもちゃの兵隊」, 岩村和雄振付。
- 313) 中村彝 = 明治二十年 (1887), 旧水戸藩士の三男として水戸に生まれる。早く父母と死別した。明治三十九年 (1906), 白馬会の葵橋洋画研究所で, 黒田清輝に学ぶが, 翌年太平洋画研究所

に移って、中村不折、満谷四朗に師事。太平洋画展、文展に出品し、明治四十三年（1910）、太平洋画会会員となる。新宿・中村屋の相馬愛蔵・黒光夫妻の後援を受け、制作を続けた。大正九年（1920）、帝展出品作の「エロシェンコ氏の像」が称賛を集め、大正十一年（1922）、帝展審査員に推挙された。大正十三年（1924）12月24日没。

- 314) 木越進 = 安綱（男爵）の四男。明治三十二年（1899）生まれ。
- 315) 新井四郎 = 晴簡（男爵）の四男。明治三十一年（1898）生まれ。
- 316) 岡部長世 = 長職（子爵）の四男。明治三十二年（1899）生まれ。
- 317) 昇進 = 柴山昌生は、この年12月1日付で、海軍中佐となった。
- 318) 久武 = 土方久武。久功の祖父・久元の弟・久規（久路の兄）の長男。明治三十一年（1898）生まれ。幼少期、与志とともに、久元邸で起居する。東京外国語学校を卒業するが、茅ヶ崎の別荘に移り住み、大正十三年（1924）には、箱根・竜禅寺で得度出家する。
- 319) 男の子 = 中沢佑・英子の次男、忠直。1月13日誕生
- 320) 和田英作 = 明治七年（1874）、鹿児島に生まれる。明治二十七年（1894）、天真道場に入門、黒田清輝に師事。二十九年（1899）、白馬会創立会員となる。三十二年（1899）、渡欧。三十六年（1903）帰国し、東京美術学校教授に任ぜられる。大正八年（1919）、帝国美術院会員になる。
- 321) 「幽霊」= 第20回公演（1月15~24日）。イプセン作、森鷗外訳、土方与志演出、吉田謙吉装置。山本安英（アルイング）、小野宮吉（マンデルス）、田村秋子（女中）、東屋三郎（指物師）、友田恭助（オスワルド）等出演。
- 322) 東屋 = 東屋三郎。本名、油屋三三郎。明治二十五年（1892）生れ。演技部員。築地小劇場に参加する前は、慶応大学の演劇青年であった。小山内薫の死去後、小劇場を脱退する。昭和十年（1935）逝去。
- 323) 山本安英 = 明治三十九年（1906）東京生まれ。大正十年（1921）、市川左団次主宰の現代女優養成所に入り、小山内薫作、土方与志による「第一の世界」で初舞台を踏む。小劇場が創設されると、第1回演技部研究生となる。築地小劇場内外戯曲117編中67編にほとんど主演し、「築地の娘」と愛されたという。
- 324) 田村 = 田村秋子。明治三十八年（1905）、東京生まれ。本名・伴田秋子。劇作家田村西男の長女。山本安英とともに、第一回演技部研究生となる。大正十四年（1925）、友田恭助と結婚。
- 325) 円太郎自動車 = 関東大震災直後の、粗末な間に合わせの東京市営バス。がたがたの円太郎馬車を連想させる所から名づけられた。
- 326) 「桜の園」= 第21回公演（2月1~15日）。チェーホフ作、米川正夫訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。花柳はるみ（ラアネフスカヤ夫人）、山本安英（ワアリヤ）、横田儔（ロバアヒン）、生方賢一郎（ピヒチック）、丸山定夫（エビホードフ）、汐見洋（フィルス）、田村秋子（シャルロット）、小野宮吉（ガーエフ）、千田是也（トロフィーモフ）竹内良作（ヤーシャ）等出演。好評で、その後何回も再演された。
- 327) 皿井の隼之介、陽の介 = 皿井立三郎（医学博士）と清江（久功の祖母・琴子の妹）の次男と三男。当時、芦屋在住。
- 328) 難波サン = 難波常三郎。柴山昌生と海軍士官学校同期の35期卒業生。
- 329) 築地にゆく = 当日は、第21回公演で、「桜の園」が上演されていた。当初、10日間の興行予定であったが、好評で大入りだったため、5日間の日延べをした。
- 330) 横田 = 横田儔。慶応大学の学生だったが、大正十三年（1924）8月、築地小劇場が行った「演劇夏期研究会」に参加し、研究生として採用された。
- 331) 伏見直江 = 明治四十一年（1908）東京生まれ。父の伏見三郎一座で3歳頃から舞台を踏み、

- 映画にも12歳から出演した。新劇にひかれて大正十二年(1923)、築地小劇場研究生となり、多くの外国戯曲の公演に少年や娘を演じる。大正十五年(1926)、帝キネにスカウトされて、映画に専念する。
- 332) 佐藤朝山<sup>ちようざん</sup> = 本名は清蔵。明治二十一年(1888)、福島県相馬生に生まれる。宮彫師であった父に木彫を学び、上京して山崎朝雲に師事する。大正三年(1914)、再興院展第1回展から出品し同人となる。十一年(1922)、院よりフランスに派遣され、ブルデルに師事する。
- 333) 林君 = 林謙三。美術学校彫刻科の同級生。後、奈良教育大学の教授をつとめ、東洋楽器の研究者となる。
- 334) 本郷の研究所 = 本郷洋画研究所。明治四十五年(1912)6月、岡田三郎助、藤島武二により、本郷春木町2丁目に設立された。翌年、藤島が川端絵画研究所に新設された洋画部の指導にあたったため、岡田がもっぱら指導にあたった。大正十四年(1925)、本郷絵画研究所と改称された。
- 335) 半込見付<sup>間</sup> = 江戸城々門および見附の一つ。現在の富士見2丁目の北西端にあたる。寛永十三年(1636)、蜂須賀氏により枡形が築かれ、同十六年新庄氏を奉行として門が建てられた。門は、明治三十五年(1902)に撤去されたが、飯田橋駅西口前に門跡の石垣が残っている。
- 336) 「寂しき人々」= 第23回公演(3月1~10日)。ゲルハルト・ハウプトマン作、森鷗外訳、小山内薫演出、溝口三郎装置。青山杉作(オッケラート)、若宮美子(オッケラート夫人)、汐見洋(ヨハンネス)、花柳はるみ(アンナ・マール)、丸山定夫(ブラウン)、吉野光枝(洗濯女)等出演。
- 337) キールン = 基隆。台北から北東へ約29kmにある、台湾を代表する港町。古くから栄え、日本統治時代には、鉄道連絡船も発着し、石炭の積出港として栄えた。
- 338) 台北 = 台北盆地の中央にある台湾最大の都市。明治二十八年(1895)に始まった日本統治時代、この地に台湾総督府がおかれていた。
- 339) 淡水河 = 雪山山脈を水源とする川で、台北の西を流れ、淡水で台湾海峡に注ぐ。
- 340) 大稲埕<sup>だいとうてい</sup> = 現在の迪化街。台北の中心街。
- 341) 林能光 = 林熊光。板橋林本源家の家長で、「林本源製糖株式会社」を創立した、林熊徴の一族。久功とともに学習院で学び、台湾総督府の評議員をつとめた。
- 342) 北投の温泉 = 台北郊外にある、台湾一の温泉郷。明治二十七年(1894)にドイツ人により発見され、その後日本人により開発された。
- 343) 林履信 = 林熊徴の一族。久功とともに学習院で学んだ。
- 344) トーシャ = 人力車
- 345) 萬華 = 淡水河の東側にある地域で、台北発祥の地。当時は淡水河の港があり、ジャンク貿易の中心地として発展した。
- 346) 龍山寺 = 広州街にある、1738年創建された、台北でもっとも歴史のある寺。創建以来、台風や地震などで何度か倒壊したが、そのたびに再建された。極彩色で彩られた豪華絢爛な典型的中国寺院で、屋根には精緻な彫刻が施されている。本殿には、本尊の観音菩薩がまつられているが、後殿には関帝や媽祖、文昌帝君などもまつられていて、仏教と道教が共存している。
- 347) 林家の総本拠 = 板橋林家花園。正式名称は、林本源園邸。清朝の時代に福建省から移住してきた林維源は、米屋の店員から身を興し、塩を売買して富を築いた。当時、成功を取めた移民は、豪邸を建て、広大な庭園を造って自らの力を誇示するのがつねだった。林一族の花園にも、故郷の福建省の建築様式が採用されている。敷地は約1万7000坪に及び、舟遊びが出来るほど大きな池があり、趣向を凝らした亭や楼、書齋などは廻廊で結ばれ、四季折々の花々が咲き乱れる花園に上流階級の人々が集った。
- 348) 台北州庁 = 当時、台湾の地方行政区画は、五州二庁に分けて統治されていた。台北州のほかに、

新竹州，台中州，台南州，高雄州が置かれ，ほかに台南庁，花蓮港庁があった。

- 349) 総督府 = 台湾総督府。日清戦争の結果，清国より台湾および澎湖列島を割譲させた日本が設置した植民地統治機構。台北に置かれ，また，東京に出張所が置かれた。
- 350) 仁齋院 = 龍山寺の西約 1.5km にあった病院。現在，仁齋医院となっている。
- 351) 一部改め，「アジンコート」の沖」と題し，『遺稿詩集』に収載。また，「島」と題し，『文化の果にて』に収載。
- 352) 『遺稿詩集』に収載。